

団塊のカタログ

第9号

平成10年2月

(吉田内閣)

第3章



この年流行ったマンガ

★ジャングル大帝 (手塚治虫)

★おトラさん (西川辰美)

日本の漫画家には2種類ある。

手塚治虫とそれ以外だ。

ワシが小学校5年生になった年の昭和34年(1959年)に「週刊少年マガジン」と「週刊少年サンデー」が相次いで発刊された。

以後、それまで主役だった月刊誌にかわって少年誌は週刊化されていったが、どちらにしてもお目当てはもちろん漫画だ。

前述のアトムは「少年」に連載されていたのだが、昭和30年代前半にワシがお気に入りだった月刊誌の漫画は右の通りである。

★

我々の世代なら一度は見たか聞いたかしたことのある作品ばかりだが、こうやって並べてみると手塚治虫がいかに多くの傑作を世に送り出しているかがあらためてわかるし、そのレパートリーの広さにも驚く。

右にあげた以外にも「リボンの騎士」(少女クラブ)のような女のコ向きのもあれば、「第三帝国の崩壊」(漫画読本)や「フィルムは生きている」(中学一年コース)「罪と罰」(単行本、28年)のようなシリアスな作

★漫画少年宮ジャングル大帝 (手塚 治虫)

火の鳥 (手塚 治虫)

★冒険王宮イガグリくん (福井 英一)

★漫画王宮ぼくの孫悟空 (手塚 治虫)

朱房の小天狗 (うしお ぞう)

ジャジャ馬くん (関谷 ひさし)

★少年宮鉄腕アトム (手塚 治虫)

鉄人28号 (横山 光輝)

矢車剣之助 (堀江 卓)

ナガシマくん (わち さんべい)

★少年クラブ宮ロック冒険記 (手塚 治虫)

よたろうくん (山根 赤鬼)

月光仮面 (桑田 次郎)

★おもしろブック宮猿飛佐助 (杉浦 茂)

くりくり投手 (貝塚 ひろし)

★少年画報宮赤胴鈴之助 (武内 つなひ)

ビリーパック (河島 光広)

まぼろし探偵 (桑田 次郎)

天馬天平 (堀江 卓)

★野球少年宮背番号0 (寺田ヒロオ)

品も数多く残している。

オリジナルが主体だが、古典・現代文学に題材をとったり、過去・現在・未来と時代の設定も様々なら舞台も内外を問わない。

短編・長編にまんべんなく名作・傑作を残しているのは言うに及ばず、「火の鳥」のよ

うな超大河作品もある。



冒険・熱血・歴史・ギャグ・ロマンスなどなど、その多種多様な題材の中で、手塚治虫の本領が発揮されるのはなんといってもアトムに代表される **S F** モノだ。

スペース・オペラ

タイム・トラベル

宇宙活劇もあれば時間旅行もあるし、舞台も地球だけでなく火星だったり金星だったり主人公だって人間とは限らない。

単に空想・科学にとどまらず、冒険とロマン、そしてヒューマニズムに満ちあふれている作品ぞろいである。

ロスト・ワールド（23年）メトロポリス（24年）来たるべき世界・化石島（26年）のように考えさせられる純SFも良いが、鉄腕アトムとか魔神ガロンに代表されるロボット物の方がいかにも手塚治虫らしくて、こちらの方がワシは好きだ。

そんな手塚治虫も、今はいない。

火の鳥を完成させずに旅ってしまったのはズルい。

本人も心残りだったろうが、その才能と尽きることのない創作意欲を惜しむ声は多い。

夢と冒険とロマンをありがとう。

流 行

★プリーツ・スカート★ア ル サ ロ
★とんでもハップン★イ カ レ ポ ン チ
★チ ラ リ ズ ム★エ チ ケ ッ ト
★貧乏人は麦を食え★ノーモア・ヒロシマ



ワシは小さい頃、**プリーツ・スカート**にあこがれたものだ。

スカートにはズボンに出来ないことが少なくとも2つある。

♪あんたがたどこサ 肥後サ 肥後どこサ
熊本サ 熊本どこサ せんばサ せんば山
にはタヌキがおってサ それを獵師がテッポ

で撃ってサ 煮てサ 焼いてサ 食ってサ
チョイとかくすッ・・・おおむねこんな歌詞だったと記憶しているが、ワシらの世代には男女とわずおなじみの手まり歌だ。

（広場や公園より路地裏か道端が似合う）

メロディーに合わせ、右手でゴムマリをぼんぼんと突き、「サ」のところは右脚でまたぎ、「チョイとかくすッ」というところでは両足をガバッと開いてマタをこぐらせ、両手でマリをつかむのが定番だった。

女のコはこの時スカートで包み込むのだがズボンではそれができない。

これが悔しくてしょうがなかった。

もう一つは、クルッと回った時にスカートがフワッと広がる、あの艶やかさだ。

これがまた羨ましくて、半ズボンのスソをつまんで回転してみたのだが、ムロンむなしに努力に終る。

こんなワシって変態だったのだからーか。



アルサロはアルバイト・サロンの略で、これの反対語の**純喫茶**とともに今では完全な死語である。



とんでもハップン（＝飛んでも八分）歩いて十分、こんなしょーもないオヤジ・ギャグを今でもタマに聞く。



イカレポンチはいかれた奴といった意味だが、これも死語。



下着や肌がチラチラ見えるさまを**チラリズム**というのだが、今ではパン・チラとかブラ・チラとかに変形している。



後の池田首相の大蔵大臣のこの頃の有名な放言が、**貧乏人は麦を食え**である。

「所得の少ない人は麦を多く食う、所得の多い人は米を食う、というような経済の原則に沿った方へもって行きたい」との発言が曲げて報道されただけなのだが、米のあり余っている今では何の意味もなく、むしろ麦の方が繊維質が多いというので健康食品としてもてはやされているくらいだ。

米が完全に自由化されたら「貧乏人は米を食え」になることは明らかで、生きていたら渡辺美智雄サンあたりが言いそうだ。

ノーマ・ヒロシマは反核運動の象徴としてあまりにも有名だが、もともとはイギリスの記者バーチェットがヒロシマの惨状を打電した時の文句。

非戦闘員に対する殺害という点では、南京大虐殺や収容所での捕虜虐待で象徴されるように、日本軍が中国や東南アジアで散々してかしてきたことの方が、人数的にはヒロシマ・ナガサキよりはるかに多い。(よその国でそう)

にもかかわらず、人類未体験の核爆弾の被害者ということで、そんな加害者の側面を中和してくれているのも事実だ。

その3日後の昭和20年8月9日、南では長崎に原爆が投下され、ソ連が日ソ不可侵条約を一方的に破棄し、ソ満国境を越えて参戦してきた。

これら一連の悲劇がなければ終戦はもっと長引いたことは間違いないし、戦争を早く終わらせる為に原爆を使用したのがなぜ悪いと開き直っているアメリカ人が多いのも現実。

善い戦争も悪い戦争もありゃしない。

国の数だけ正義はあるし、どの国も平和を求めて戦っているのだ。

勝ち負けは結果論にすぎないが、ムロン勝者の正義がまかり通り、歴史もそれに準じるのもジョーシキ。

西洋史はあっても東洋史はないもんね。

新 製 品

★トリス・ウイスキー★ヤ ク ル ト
★胃 カ メ ラ★貸しおむつ1組4円
★新千円札(聖徳太子!)
★ボーリング場(東京・青山)

トリスはサントリーの普及版。

早い話が安物なのだが、ワシが大学生の頃はよく上野のバーで飲んだもので、その頃は角瓶とかオールドは憧れの的であった。

そこへいくとヤクルトは立派で、マイナーの一飲料からスタートした弱小企業なのに、今では化粧品も売っているし、プロ野球の球団さえ持っている。

貸しおむつも今は紙おむつの時代になっている。

この聖徳太子、32年には5千円札に、翌33年には1万円札にと、物価と所得の上昇につれ順調に昇格して行き、高額紙幣を独占していて、かつてはお札の代名詞だったのだが、37年にニセ千円札が大量に出回ったのをきっかけに翌38年には伊藤博文に千円札の座を乗っ取られ、59年の新札発行にともない、完璧に消滅してしまった。

夏目漱石(千円)や稲渡戸稲造(5千円)や福沢諭吉に跡目を譲り、聖徳太子は完璧に消え去ってしまったが、今のお札はなにか安っぽく見えてしょうがない。

値 段

★(普通の)フロ代10円
★もり・かけ15円 ★ピース50円

今では入る時に5千円、出る時に2万円取られる特殊なおフロもある。

ピースの「鳩がオリーブの葉」を加えている秀逸なデザインは今でも健在。

ワシが育った所は東京都文京区春木町3丁目25番地であるが、高校生の頃に本郷3丁目に町名変更された。(生れは江東区亀戸)

ワシはこの**本郷**という地名をこよなく愛しており、**春木町**という地名に愛着心は抱いたことは一度もない。



中央会堂幼稚園を卒園したワシは、東京都文京区立湯島小学校へ進学した。

小学生のお楽しみといえば、いつの時代でも遠足と運動会だろう。

そして、運動会の華は個人なら徒競走、団体ならリレーだ。

当時、湯島小学校ではリレー競技を5・6年生の町会対抗でやっていて、それがプログラムの最後を飾っていた。

生徒や家族、さらには校長・教師・来賓も盛り上がるのだが、小学校一年生のワシはこのリレーがイヤでたまらなかった。

なにしろ第一走者からアンカーまでのハナからシマイまで、ケツを走っているのがこの春木町会チームなのだ。それも毎年。

それを低学年のときからいつも見せつけられていたものだから、町内の先輩に対して敬意を払えず町会に誇りを持てなくても、ワシの責任ではない。

他にもある。

小学校のすぐそばにはおなじみの**湯島天神**があって、毎年5月下旬のお祭りがこれまたワシらのお楽しみなのだ。

お祭りといえばお神輿、これを町会ごとに神社のお蔵に奉納、それぞれの町会の名前が黒々とスミの色も鮮やかに扉にクッキリと太書きされていて、金助町・湯島天神町・切通坂町・湯島新花町等々とある中で、春木町の

はなぜかない。

ドサクサにまぎれてよその町会のミコシをかつぐしかなく、これがなんとも情けない。

ミコシは今でも大っキライだ。



そんな春木町が、ある日突然・・・

本郷3丁目にヘンシンした。

もともと**本郷**という町名はあったのだが、それが拡大され、新**本郷**1丁目から7丁目として生まれ変わった。

その中でも3丁目ともなると、地下鉄丸ノ内線の駅名にもなっているくらいだから知名度は申し分ない。

祭りのミコシもなければ対抗リレーではいつもケツ、そんな情けない町会が町名だけでもグレードアップした。

これは、うれしかった。

なにしろこのニュー**本郷**、元町・真砂町・本富士町・金助町などの名前からしても勇ましい町たちの集合体なのだから。

当時、町名変更がやたら多く、由緒ある町名が消えてなくなるのを惜しんだ市民運動が全国各地で起こった。

伝七親分の黒門町、先生の真砂町、土器の弥生町、これら由緒ある地名がなくなってしまふ(弥生だけは残った)からだが、中にはワシのようにセコい市民もいる。

たとえば、本町・中央・〇〇平・△△台・□□野みたいに、大して意味はなくてもなんとなくエラそうな町名も、そんな市民の要望に配慮しているのではないだろうか。

身近な所では、幸谷・小金・二ツ木・大谷口・横須賀から**新松戸**に町名変更されて大多数の住民が喜んだはずで、くたばれ由緒・そのけ伝統、それも市民の声である。